



タイトル Title	嫉妬研究の概観と展望(A Review of Studies of Romantic Jealousy)
著者 Author(s)	神野, 雄
掲載誌・巻号・ページ Citation	神戸大学発達・臨床心理学研究,14:18-28
刊行日 Issue date	2015-03
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLCDOI	10.24546/81008874
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81008874

嫉妬研究の概観と展望

A Review of Studies of Romantic Jealousy

神野 雄*
Yu Kanno*

要約: 本論文の主な目的は、現在まで行われてきた社会心理学的な恋愛関係における嫉妬研究の大きな流れの紹介と他の分野の嫉妬研究の紹介も行うことで今一度嫉妬とは何か、検討し直すことにある。私たちにとって重要な他者との人間関係は生活全般や人生に関わる大きな重要性を持つ。それゆえに恋愛関係や夫婦関係を代表する人間関係を守ろうと、あるいはすがりつこうとして私たちは嫉妬 jealousy を経験する。嫉妬の度合いが過剰となると関係の崩壊にもつながり、また事実に基づかない妄想的な嫉妬はやがて病理的な色を帯びるが、そもそも嫉妬妄想と嫉妬の地平はどこにあるのだろうか。嫉妬しないこと・嫉妬を抑圧することが万人の理想の状態として意識されるべきなのだろうか。本稿ではまず嫉妬の字義の整理、妬み・羨望との異動を論じ、次に精神病理学・精神分析学・進化心理学、そして特に社会心理学的観点からの嫉妬研究について表層的ながらも紹介を行い、そのプロセスや病理性の所在について論を試みた。今後更に広い知見から総合的に嫉妬という力動を捉えていくことが求められるだろう。

はじめに

恋愛関係や夫婦関係におけるやきもち=嫉妬は、その程度が過剰なものとなれば個人が守ろうとした重要な人間関係そのものの崩壊につながりかねないが、果たして嫉妬は経験しない方が良いものとしてしまっても良いのだろうか。Guerrero & Andersen(1998)が表すように嫉妬は否定的な感情により関連が深いとされるが、同時にGuerreroらによると嫉妬はパートナーへの愛と感謝を示し、倦怠期の恋愛に活気をもたらす相手をどれだけ慮っているか気づかせられるとも表されている。Buss(2000)が示すように嫉妬は愛し合うカップルを固く結びつけることもできるが、時として昨日まで優しくあったパートナーを残忍な復讐者に変えることもある。私たちが嫉妬について考察する際、その破滅的な要素が着目されがちではあるが、それと表裏一体になって含まれるポジティブな要素が指摘されていることにも着目すべきであろう。

しかし荻野(1983)が指摘するように、嫉妬者がその嫉妬的情念から、恋人や恋敵に殺意を抱いたり、程度の大小はあれ、実際に危害を加えるような行動に及んだり制裁を加えることはまれではない。相手を束縛し、身体的・心理的暴力を振るう Domestic Violence (以降 DV と略記)も国内外を問わず近年大きく取り上げられる問題の一つになっている。遠藤(2007)や瀧田(2009)によれば DV の大きな要因の一つにはパートナーの嫉妬が挙げられ、嫉妬は関係の崩壊のみならず、時に個人の身体を傷つけ、生命すらも脅かしかねない事態につながることもあるといえる。

この 20 年ほどでインターネットと携帯電話の普及により「いつでもどこでも誰とでもつながることのできる」世の中にはなりつつあるが、一方でこれらの技術を悪用する形でパートナーの監視や束縛、プライバシーの侵害が簡単に可能となってしまっている。海外

では SNS サイト Facebook の利用と恋愛関係における嫉妬を絡めた研究論文も複数発表されており (e.g., Muise, Christofides, & Desmarais, 2009; Elphinston & Noller, 2011), 恋愛関係も嫉妬も、それに由来する関係内の葛藤も科学技術等の進歩と共に複雑性・多様性を増してきている。「嫉妬」というこのとかく思い通りにならない、されど多かれ少なかれ私たちが普遍的に経験する感情について理解していくことは、恋愛関係・夫婦関係にある人々の葛藤の低減や人生を通じて私たちが大切な他者へ持つこの強い執着の功罪を理解していくことにつながるだろう。

嫉妬に関しては心理学的な研究や書籍も数多く、国内でも嫉妬について触れている文献の数は 20 世紀初頭から比較的多く見受けられる。田中(1989)は精神病理学的な観点から病的嫉妬に関する研究をレビューする際、第二次世界大戦以前の国内の嫉妬研究について、注目すべきものは見当たらないとまで表している。確かに精神病理学や心理学等、今日的な学問の俎上に乗る内容ではないにしろ、現在のそれに続く嫉妬研究の第一歩として、その当時の人々の「嫉妬」観や夫婦間等について理解を深められるという点で過去の文献を参照する価値は大いにあると考えられる。国内ではそういった資料的文献として、日本に心理学自体が輸入されて間もない明治 38 年(1905 年)に石田孫太郎によって『嫉妬の研究』が、そして大正 2 年(1913 年)には同じく石田孫太郎により『嫉妬論』が、『嫉妬の研究』を大幅に加筆する形で執筆されている。これらは先述のように必ずしも実証的なデータに基づいた今日的な心理学的研究とはいえないが、当時としても既に同じ「嫉妬」として表現されていた嫉妬と妬み(石田によれば『變形的嫉妬』)の異同や嫉妬のもたらす功罪について考察を行っていることは大変興味深い。その後も半田(1920)や大橋(1921)などにより、第二次大戦以前でも嫉妬を家族関係、恋愛

*神戸大学大学院人間発達環境学研究科後期課程

関係の観点から考察する書籍は国内だけでも多数発刊されている。こういった明治時代末期や大正時代の文献を引くまでもなく、現在に至るまで洋の東西を問わず様々な嫉妬論が展開されてきた。今回問題とする心理学的な観点での嫉妬への言及・研究は精神病理学・精神分析学的立場から嫉妬妄想に着眼する形で始まり、実証的な研究においては堤(2006)が指摘するように社会心理学的な研究が主流となっているように見受けられる。特に恋愛関係や夫婦関係など、親密な二者関係における嫉妬については、この30~40年ほどで特に海外において数多くの心理学的研究がなされてきた。その数々の嫉妬研究の中でも多くを占めるのが尺度を用いた質問紙法による実証的なアプローチである。

White(1981)やWhite & Mullen(1989)によれば、嫉妬は知覚された脅威に対しての相互に関連のある思考・感情・行動の complex での反応であるとされる。この他にも数々の先行研究における「嫉妬」の定義や表現がなされているが、ここで Bevan(2013)による嫉妬を総合的に捉える優れた試みを軽く紹介しておきたい。それは先行研究の膨大な知見を総合して、混乱しがちな嫉妬への捉え方を4つの次元に(多少の重複などはあれ)分けて整理を試みるものである。その1つ目が嫉妬の①Source 原因で、すなわちこの次元は嫉妬の原因が情愛的/性行為を伴うようなものか、感情的親密さに由来するものか、友人関係や家族関係におけるものか、活動や重点を置いている何かに関するものか、ということである。次は嫉妬を生起させる関係への脅威の②Nature 性質についてで、この次元はそもそも認識された脅威(三角関係のライバルなど)が実在するものに対する反動的なものか、非実在・不特定なライバルへの妄想的なものか、といった次元である。続く次元となる③Component 要素は後々詳しく述べるが、White(1981)に端を発し Pfeiffer & Wong(1989)が実証的な尺度を作成した嫉妬の捉え方で、嫉妬を経験し表現・出力するプロセスを指し、多くは認知的要素・情動的要素・行動的要素の3つで捉えられる。最後が④Degree 程度の次元で、こちらは嫉妬の程度が正常な範疇にとどまっているか、病的にまでなっているかという次元を表す。嫉妬について総合的に捉えようとする研究は数あれど、この Bevan(2013)による嫉妬の4次元への分類は嫉妬を考察する際に非常に役立つものとなるだろう。

嫉妬に関する心理学的研究の優れた日本語でのレビューとしては中里(1991, 1992a, 1992b, 1992c, 1993)による初期の社会心理学的な先行研究のレビューを含む一連の論文や、岩脇(2000)による進化心理学的観点に特化してレビューを行った論文、澤田(2009)による嫉妬と妬みの弁別・それぞれの発達についての論文、木村(2010)による嫉妬の臨床的研究における意義の提唱を旨とした論文などが存在する。これらの論文では、いずれも嫉妬という概念を理解するにあたり有用な理論や研究が紹介されている。度を越えた嫉妬や事実に基づかない妄想的な嫉妬が時には大切な二者関係を破壊しうるとは周知の通りであるし、また時には適度な嫉妬が関係を維持しうるともあるという点については上で既に軽く触れている。こういった嫉妬のもたらす功罪については各立場から様々な考察が寄せられているが、上記のレビュー論文を参照しても特に精神疾患としての「嫉妬妄想」と一般的な「嫉妬」を分けて論が進められがちで、俯瞰的な視点があまり持たれていない。また海外の実証的な嫉妬研究でよく用いられる嫉妬の要素やプロセス (Bevan(2013)の分類の

③に該当する部分) についての言及も不十分であるようにも見受けられる。これらの問題点はそもそも国内ではまだ嫉妬研究に対する興味関心が比較的薄いことによる部分もあると考えられる。そこで本稿では社会心理学的観点を中心に複数の観点からの先行研究や文献をレビューすることで、今一度嫉妬とは何か、理解を深めることを大きな目的とする。

そもそも嫉妬とは何なのか? 嫉妬は心理学における一つ概念であると同時に日常生活でも頻繁に用いられる単語でもあり、非常に広義的な言葉である。嫉妬について心理学的に研究・考察されているほとんどの論文では「嫉妬」と「妬み」や「羨望」といった類縁の感情との弁別について紹介することで嫉妬の語義を整理・明確化してから、本論に入っている。先述した石田(1905)でも、近年執筆された最新の論文でもその一点については非常に似通っているといえる。そのため、嫉妬の病理的・非病理的側面について論じる前段階として、そもそも嫉妬とはどういう言葉・概念であるのかということへの理解を深めるために、まずは「嫉妬」と「妬み」、あるいは「羨望」の異同について先行研究を用いて論じることからはじめたい。

2. 「嫉妬」と「妬み」あるいは「羨望」の異同

「嫉妬」と「妬み」あるいは「羨望」の異同について、Delpierre(1954)は精神分析的立場から“羨望とは、自分が望みながらもまだ所有していない事がらを楽しんでいる者に対して感ずるところの憎しみの感情である”(p.41)、また“嫉妬とは、自分自身の所有物を持ちつづけようとするときの邪推深い気遣いである”(p.44)と表した。また中里(1992b)は1980年代ごろから興った社会心理学的な嫉妬研究を概観して“嫉妬は、自分が享受し、以降も保持し続けたいと望んでいる財貨(財産、地位、業績、愛など)が、他者に転ずるかもしれないという、疑念や惧れに苛まれている状態の感情であり、他方、羨望は、そうした望ましい財貨に関しては、自分ではなく、他者が優位な立場にあることに対する不快や恨みがまじさを含意する”(p.117)と表した。このように、先人たちは各立場から「嫉妬」とその類縁関係にある感情を様々な言い回しで弁別している。定義の紹介はこの程度に留め、まず言葉の意味の整理から、これらの違いに目を向けてみよう。

石川(2009)によれば、語義としては我が国の「嫉妬」と「妬み」という言葉自体の間にはほとんど違いはないことが指摘されている。広辞苑(第6版)では、「嫉妬」は「①自分よりすぐれた者をねたまそねむこと。②自分の愛する者の愛情が他に向くのをうらみ憎むこと。また、その感情。りんき。やきもち」とある。一方「妬む」は「①他人のすぐれた点にひけ目を感じたり、人に先を越されたりして、うらやみ憎む。そねむ。また、男女の間でやきもちをやく。②癪だと感ずる。くやしいと思う」であり、両者に明確な違いを見出すことはできない。一方で「羨望」は「うらやましく思うこと」とされ、「嫉妬」「妬み」とは少し違った性質で男女の情に直接的に絡む語義は持たないようである。「妬み」と「羨望」は論者により微妙に異なって受け取られるが、近年の日本語での論文・研究を参照する限りこれらはひとまとめに「他人のすぐれた点をうらやむこと」を指す意味として用いられることが多い。「羨望」は「妬み」と比べられる場合においては、「妬み」に比べ対象への悪意や敵意が薄いも

のとして弁別されることが多いように見受けられる。これら「妬み・羨望」との弁別を図るため、本稿では「自分の愛する者の愛情が他に向くのをうらみ憎むこと」の方の意味を「嫉妬」、「他人のすぐれた点をうらやむこと」を基本的に「妬み・羨望」と便宜的に定義して論を進めることとする。

Ben-Ze'ev(2010)が指摘するように、何かを独占したい心の動きを表す言葉として、英語圏でも *jealousy* と *envy* は混同して用いられているようである。こちらについても語義の整理を試みた石川(2009)によれば、*jealousy* は「自分の持ち物、あるいは自分に所属するものを誰かに奪われるのではないかという怖れ」を意味し、*envy* は「誰かが持っているもの、あるいは誰かに帰属するものに対する願望と、誰かが持っていることへの怒り」を意味する。これら *jealousy* と *envy* は意味合いとして嫉妬と妬み・羨望の関係に厳密に対応しているわけではないようだが、訳語においては *jealousy* を嫉妬、*envy* を妬みや羨望とすることが多い。

上記のように「嫉妬」を「自分の愛する者の愛情が他に向くのをうらみ憎むこと」とし、「妬み・羨望」を「他人のすぐれた点をうらやむこと」と考えると、これら「嫉妬」と「妬み・羨望」の間には大きな違いがあり、語義を混同する理由はないように見受けられるかもしれない。しかしやはり嫉妬と妬みの経験には混同されるだけの通底する部分があると考えるのが自然であろう。この点に関してはどちらも自分にとって重要で望ましい価値ある何かの所有に関する彼我の違いを問題として比較するものであるため、という共通項を挙げるのみの説明もできるが、ここで岡野(1988)による精神分析的立場からの性愛関係における嫉妬の苦痛に関する文章を引用する。

まず嫉妬者は第一段階として、第三者(後の嫉妬対象者)が愛情対象を奪い去ろうとしているとき、その状況を把握する過程で一瞬その第三者に対して同一化し、自らの手元を離れつつあるその愛情対象との満足体験をまざまざと想像、想起する(この現象は哲学的には他我ないしは主体他者の体験ということになる)。そして次の瞬間に嫉妬者は我に返り自らをその第三者から切り離し、そのいわば幻覚的な満足体験に見合っただけのものを実は逆に自らが失いつつあることを自覚するのが第二段階である。そしてこの意味で嫉妬の体験とは、二相性なのである。(p.317)

嫉妬者はそこで嫉妬対象者が味わおうとしている快樂を一瞬擬似的に体験するというだけでなく、嫉妬対象者のなかに自分には不足ないし欠如している属性を見出し、敬愛の念をすら抱く可能性がある。その属性とは、まさに愛情対象を魅了しその愛を保証するものであり、愛情対象もそれが嫉妬者本人には不足していたために嫉妬対象者へと走ったのである。いわば嫉妬者は同一化の相で相手の中に自己の理想像を見出し、その対象者に一時的に魅せられる(pp.320-321)

つまり岡野(1988)によれば、今まさに愛情の対象や望ましい価値を奪われんとしている、あるいはその疑惑の渦中にある嫉妬者は、対象を自分から掠め取っていくであろう第三者(ライバル)に「同一化」して自分が第三者として愛情の対象と満ち足りた状態を想起、ないしは想像する。しかし次の瞬間には自らの「危機的」状況に意識を戻すのである。文脈的に岡野(1988)の本意からは少し外れるだ

ろうが、ここで(恐らくは自分よりも遥かに満足に)愛情対象を体験しているであろう(=望ましい価値を保有している可能性のある)想像上の第三者と、対象を奪われつつある(=既に望ましい価値が奪われつつある)自分との差に嫉妬者が衝撃を覚え、愛情の篡奪者たる第三者へ苛烈な妬みを向けることも想像に難くない。また木村(1975)は三角関係の状態を経験される嫉妬について、古事記の表現を参考に、嫉妬者の恋敵へ向けられる感情は劣等感を含むネタミで、一方で恋仇とも関係のある恋人へ向けられる感情はウラミであると指摘している。これらの指摘から、嫉妬の経験には時に恋敵へ向けられる感情として妬みの要素も色濃く内包され、それがために混同されがちであることについても理解ができるのではないだろうか。

この「嫉妬」と「妬み」あるいは「羨望」の相違点・共通点については実証的な心理学的研究でも検討がなされている。例えば、Smith, Kim, & Parrott(1988)は、*jealousy* (嫉妬) と *envy* (妬み・羨望) という言葉に関連する感情として、嫉妬に特有なものは疑惑、拒絶、怒り、損傷、喪失の恐れ、報復への願望で、一方の妬みに特有なものは向上志向、切望、劣等感、自己批判とする結果が得られている。更に、Smith, Kim, & Parrott(1988)は得られたデータをもとに *envy* (妬み・羨望) は単一の意味合いでのみ使われることが多いが、一方で *jealousy* (嫉妬) は *envy* (妬み・羨望) の意味合いでも用いられることを明らかにした。つまり、*jealousy* の一語の方が意味合いが広く、意味する内容として *envy* を包含しうることを実証的に示したのである。中里(1992a)も日本の大学生を対象としてこの Smith, Kim, & Parrott(1988)と同様の調査を行い、「羨望」と「嫉妬」に共通する感情項目として「孤独を感じる」「興奮を覚える」「絶望にとらわれる」「感情を抑圧する」などを抽出した。また嫉妬に特徴的な感情項目として「憎しみを持つ」「恨みを抱く」「裏切られる」「敵意を持つ」「怒りを覚える」「傷つけたいと思う」「不快に思う」が、羨望に特徴的な感情項目として「憧れる」「向上を努力する」「所有物を切望する」「劣等感を覚える」「自分を恥ずかしく思う」「不運を嘆く」「自分を意識する」が抽出された。この結果は Smith, Kim, & Parrott(1988)を支持する方向の結果といえよう。

また、Festinger(1954)の社会的比較理論に端を発する形でいわゆる狭義の嫉妬を「社会的関係における嫉妬 *social-relation jealousy*」、妬みや羨望にあたるものを「社会的比較における嫉妬 *social-comparison jealousy*」とする見方も存在する(e.g., Bers & Rodin, 1984; Salovey & Rothman, 1991)。近年の日本国内の実証的な嫉妬研究も中里(1991, 1992a, 1992b, 1992c, 1993)をはじめとして社会的比較と社会的関係における嫉妬の異同について検討するものが多く見受けられる。例えば堤(2006)は具体的な状況に基づく「社会的比較における嫉妬」「社会的関係における嫉妬」の2因子構造を持つ嫉妬傾向尺度を作成し、両因子ともに自己愛の健康的な側面よりも、自己愛の病的な側面との関連が考えられることなどを実証的に示している。

本節では嫉妬と妬みあるいは羨望との異同について論じたが、嫉妬の中でも特に論じられることの多い親密な二者関係における嫉妬についてまず考察をしてから各論に移ることとする。

3. 親密な二者関係における嫉妬

Parrott(1991)によれば、嫉妬はパートナーの関係がライバルによ

って喪失の脅威に晒されたとき経験される感情とされる。この親密な関係における嫉妬ほど日常的で、かつ私たちを非日常的な精神状態へと揺り動かす経験・感情があるだろうか。南(1949)によれば嫉妬の起源は子どもが愛情の対象を独占しようとする欲求にあり、子どもが愛情への競争者(同性の親や兄弟など)を意識しはじめた際に起こるとされる。その後の人生でも、まず青年期や成人期において、嫉妬は友人関係や恋愛関係・夫婦関係において経験される。老年期においても、様々の精神障害の症状として配偶者が浮気しているという妄想を抱く嫉妬妄想は船山・濱田(2006)によれば若い人より高齢者に、倉持(1979)によれば圧倒的に既婚者に多いとされる。そのため、人は老いても嫉妬から無縁ではいられないであろうと考えられる。上杉・榎場・馬場(2002)が大学生に「今までの体験の中で、嫉妬の感情を最も強く抱いた体験・出来事を思い出して」記述してもらった質問紙調査を行ったところ、幼児では「父母の愛情が兄弟姉妹などに向けられた場合」、幼児～中学生では「自分にとって大切な友達の好意が他の子どもに向けられた場合」、そして中学生～青年では「好意を抱いている異性の好意が他の人に向けられた場合」の嫉妬が主となっていた。

この生涯に渡り経験される嫉妬の中でも、特に恋愛関係や夫婦関係におけるそれは疑わしさと確信、愛しさと憎しみの両面的で複雑な感情に満ち、最も激しいものであるとされる(三浦・奥山, 2003)。西平(1965)の指摘を参照するならば、その理由の一つとしては友人関係ならば第三者を排斥しなくても関係は成立するが、恋愛関係や夫婦関係はどうしても(少なくとも近現代日本においては)「ふたりだけ」を要求し、相手を他の同性から独占することを求める性質を持つためであろう。この関係で経験される嫉妬は時に容易に苛烈さを伴い、その性質が全く事実無根の本人の思い込み過ぎない証拠に基づいたいわゆる妄想的なものになった際、あるいは対処行動があまりに(社会・文化的に受容されないほどの)過剰な形を取った際に、「病的な」嫉妬と評されるのである。シェイクスピアによる『オセロー』などは「病的な」嫉妬の最も有名な例の一つである。旗手イアゴの悪巧みにより、将軍オセローは徐々に自らの妻デズデモーナが副官キャシオと通じているのではと疑いだすようになり、最後はオセロー自らの手で無実のデズデモーナを殺し、真実を明かされた後で自殺を遂げる。高橋(2014)も指摘するようにDVの一つの原因は極端な嫉妬心ともされ、『オセロー』の悲劇はもちろん創作物とはいえ、嫉妬が時にここまで激情を孕み、現実的に惨劇を起こしかねないことを示唆している。

嫉妬を過剰に経験する場合、嫉妬者には多大なストレスがふりかかる。また多大な嫉妬の処理過程がパートナーやその関係に対して不適切な形を取ってれば、嫉妬者の周囲にもストレスが拡大する。そういった意味で嫉妬は『オセロー』がごとく破壊的な性質を持つものであるとも表されることも多い。オセローのように根拠なくパートナーの不実を疑う病的な嫉妬の側面について検討していくことは親密な関係で生まれる悲劇や葛藤を未然に防ぐ観点からも意義があるといえるだろう。またこのように嫉妬は「否定的な」側面が強調されて考えられやすい。その一方で、親密な二者関係においては適度に嫉妬を経験しそれを適切に処理することには、関係の維持や関係の質の向上につながる肯定的な側面も嫉妬には存在するのではないかとする見方や、嫉妬喚起状況(家に帰ると妻が見知らぬ男

と不倫していた等)に反動的に嫉妬を覚えることには嫉妬の正当性こそあれ、病理性はないとする見方も根強く存在する。こちらの観点での嫉妬について深く検討することも、嫉妬の意義を考える上で有用になると考えられる。

荻野(1983)によれば、人間の感情や情念が問題となるとき、それがどこまで正常か病的かは必ずしも明確に区別できない場合が多いが、こと恋愛関係における嫉妬の問題では、それが正常か異常かを判断することは実際の精神医学の臨床においては非常に重要であるとされる。それでは何が嫉妬を「正常」たらしめて、何が嫉妬を「異常」たらしめるのか。例えば特に根拠や証拠はないがふと恋人が自分に隠れて浮気をしているというような疑念が頭から離れなくなった場合、それは「異常な」嫉妬なのだろうか。宮城(1963)が指摘するように嫉妬は私たちの意識をくもらせ正常な判断力を奪い、嫉妬にかられた離婚、殺人や傷害事件、ストーカーなど思いもよらぬ行動を取らせることがあるが、破滅的な行動を取ることが「異常な」嫉妬と見なされるのだろうか。

次節では正常な嫉妬、異常な嫉妬を考えるうえで重要な精神分析学及び精神病理学的観点からの紹介を行う。

4. 精神分析学・精神病理学的観点における嫉妬、嫉妬妄想

先述の嫉妬の経験(jalousy experience)に関する病理性・非病理性を検討する際に嫉妬妄想を取り上げて論じることは特に有用な知見をもたらすと考えられる。嫉妬妄想について言及する大きな観点としては精神分析的観点と精神病理学的観点が存在する。宮城(1963)や山本(1967)、古城(2014)などによれば嫉妬妄想あるいは病的嫉妬の研究は古くは嫉妬そのものではなくアルコール中毒の症状や統合失調症の症状の問題としてとりあげられ、注目されてきたとされる。

宮城(1963)やKingham & Gordon(2004)が指摘するように、嫉妬妄想は一つの病気ではなく症状としてみるべきであり、熱や発疹と同じように様々な場合に出現する。最も頻繁に関連が示唆されているのが慢性的なアルコール中毒であり、古くから嫉妬妄想はアルコール中毒の特徴の一つにもなっている(宮城, 1963)。他にもパラノイア、妄想型精神分裂病(統合失調症)、躁うつ病など様々な疾患によっても嫉妬妄想が見られる(三好, 1993)。嫉妬妄想は①パラノイア性の嫉妬妄想、②分裂病性または統合失調症の嫉妬妄想、③中毒性ならびに器質性による症候性の嫉妬妄想に分けられるとされる。岡野(1988)が嫉妬妄想患者の生活史を辿って分析したところによると、嫉妬妄想の発現前に患者が種々の原因で愛情対象との性愛関係の維持に困難を感じていた場合が多いとされる。それは嫉妬妄想の初期的研究におけるアルコール性の性的能力の低下と残存する性欲との乖離の話にも整合するところがある。嫉妬妄想患者はこのように性的能力の低下や自信喪失、家庭内での力関係の逆転などの要因により、妄想の発現する前から愛情対象を喪失する苦痛を嫉妬とは独立した形で体験する。山本(1967)が病的嫉妬の成立背景に配偶者との夫婦生活に対する不信や失望があるとしていることから、解釈するに愛情対象が存在しているのに対象を喪失してしまったような不満・不信や空虚感の理由を探すような形で、嫉妬妄想患者にはある時自分が占有すべき愛情対象の愛情を裏で密かにせし

めている憎い第三者の存在がふと思いつかれて、一気に嫉妬の三者構造が妄想として成立してしまうのであろう。岡野(1988)は“通常の恋愛の嫉妬による苦痛は相手の浮気がそもそもの出発点であるが、嫉妬妄想の苦痛は(妄想的)嫉妬対象者の出現で一つの結論をみる”(p.325)と嫉妬妄想に関する考察を結んでいる。直接の原因の違いや確信の程度の差はあれど、関係に対する不満感の理由を探る形で相手の不実を妄想する点においては、一般的な恋愛関係における根拠のない「病的な」程度の嫉妬と嫉妬妄想の間には大きな違いは存在しないように考えられる。

また精神分析的な観点では Freud(1922)は、嫉妬を情動状態の一つとしてとらえ、競争的な嫉妬つまり正常な嫉妬と、投影された嫉妬と、妄想性の嫉妬の三種が三層に重なっていると表した。この観点は精神病理学的観点とは立場を異にしながらも嫉妬妄想に関して参照すべき有用な知見を提供していると考えられる。

競争的な嫉妬について、Freud(1922)は精神分析として大して言うことはないと言っている。解釈するに、これは私たちの日常生活で一番体験される種類の嫉妬である。それはすなわち愛情対象が自分以外の対象に注意を向けており、自分がそれに対する反動的な怒りや愛情の対象が失われたのではという苦痛、ライバルへの敵意を体験する種類のものである。岡野(1988)によればこの苦痛の特徴としては多分に利他的で実際の知覚像に依存し状況に即応したもので、嫉妬者は深刻なナルシズムの傷つきというよりは置かれた状況を不当であると主張するような種類のものでされる。一方でこの正常な嫉妬も、Freud(1922)によれば決して完全には合理的なものでなく、それは嫉妬が深く無意識に根を張り、エディプス期の最初の情緒的な同様の延長だからであるとされる。幼児はエディプス期に初めて性欲を感じ、その欲動を最も身近な異性、つまり異性の親にぶつける。しかし、その異性の親の愛を得るためには、自分にとって非常に強力な競争相手ともいえる同性の親と争う必要がある。必然的に幼児は同性の親との競争に負ける。また、自分が異性の親に好意を寄せることが同性の親に露見してしまいはしないかと恐れ同性の親と同一化することでそれを乗り越えようとする。そして後に成人してからも、第三者が自分にとって重要な恋愛関係をおびやかすごとに、この時味わった無力感、ほしいものは何一つ手に入らないという自覚、成功したライバルに対する敵意などがふたたびよみがえり、嫉妬にかられる、とされる。これが、エディプス(エレクトラ)コンプレックスといわれる葛藤と、それに由来する嫉妬であるといわれる。

また、Freudによれば投影された嫉妬とは、自らの実際の不実や、抑圧されていた不実への衝動から出てくるもので、このような事実や衝動への罪悪感を和らげる方法として自分の衝動を相手に投影すること、つまり相手もそれほど善良でない、不実を働こうとしていると考えることで、自己正当化することができる。この場合の投影から生まれる嫉妬は、ほとんどが現実的に何の根拠もないものであるとされ、この場合の愛情の対象の恋人や恋敵は嫉妬者が心の中で作り出した悪玉であると宮城(1963)も指摘している。そのため Pines(1992)によれば、このような投影された嫉妬は、しばしば精神分析的セラピーに好反応を示すとし、自分の嫉妬は不倫をしたという衝動を抑えた結果生じたものであり、自分の相手は不実ではないのだということを認識さえすれば、嫉妬の悩みは十分に

解決されると述べている。

妄想性の嫉妬も、Freudによれば不実への衝動を抑圧することから出てくるものとされるが、この場合の対象は同性であるとされる。このことについて Freud は、幼いころに同性の親に惹かれていた、自分の中の異性的な素質が、成人になってから嫉妬するとき、自分と同性のライバルに対して魅力を感じるというかたちで再現されることがあるとした。異常に強い同性愛的な衝動から自分を守るため、嫉妬深い男性は「彼を愛しているのはわたしではない。彼女なのだ」と考えるとされる。しかし、この妄想性の嫉妬については、Pines(1992)や宮城(1963)、高橋(2006)も指摘するように、一般化して理解することの困難さゆえに後世の多くの論者から疑問視ないし批判がなされている。

結論として、精神分析的・精神病理学的な観点では嫉妬の経験のされ方について、嫉妬の極致ともいえる嫉妬妄想をその射程に入れる形で幅広く考察を行っている点で大変興味深い。Freud(1922)も示す通り嫉妬には正常な側面と病理的な側面があり、相手の浮気を出発点にしない嫉妬は嫉妬妄想にもつながりうる。二つの観点を強引に結び付けるならば、ある程度の素因や環境下で現在のパートナーとの関係において理想の関係像を見失った場合、他の相手となれば理想の関係を築けるかもしれないのという心理を自らで引き受けることができず、パートナーに投影することから妄想的な嫉妬が生起していくのかもしれない。

5. 進化心理学的観点における嫉妬

進化心理学的な観点から解釈をすれば、嫉妬は(進化心理学的な観点の特質からしても)病理的な感情としても考えられる一方で、生物としてのヒトが自分の遺伝子や子孫を残すのに非常に重要で役立つ手立てとしても考えられている。1980年代ごろから、男女が嫉妬を感じる手がかりには性差があることが論じられてきた(Daly, Watson, & Weghorst, 1982 など)。

長谷川・長谷川(2000)によれば、嫉妬は自分が愛する相手、大切に思っている相手を自分だけのものととどめておきたいとする感情で、ヒトの配偶者防衛行動(一方の性の個体が配偶相手を他の同性個体から防衛し、自分としか配偶しないようにする行動)を引き起こすものであるとされる。Buss, Larsen, Westen, & Semmelroth(1992)やBuss(2000)によれば、男性がより子に大きな投資を行う場合ほど、配偶者から生まれる子の父性の確実性を担保するために配偶者防衛を行うとも考えられる。女性にとっては自分が出産した子どもは少なくとも自分の子であることは確実であるが、DNA 鑑定などがなかった時代では男性は配偶者の女性から生まれた子どもが自分の子かどうか、確かめる術はなかった。そのため、もしも男性 A の配偶者が男性 A を性的に裏切り、他の男性 B との間の子どもをもうけて男性 A に育てさせることがあれば、男性 A が子どもを育てる時間的・精神的・物理的なエネルギーは全て男性 B の遺伝子・子孫に捧げられることになる。そのため、父権制度の強い社会では子孫の血統の不確実性をもたらすことになるので男性が性的な嫉妬を示す＝女性の性的不貞を未然に防ぐことで、父親である確信を高めることにつながり、結果として男性は女性の情緒的な浮気よりも身体的な浮気に抵抗感・危機感を覚えると考えられる。また一方で、女性の場合でも男性の浮気を見過ごすと不利益を被ること

になる可能性がある。それは、妊娠してから子どもの父親となるべき人物がよその女性のもとへ行行ってしまっ帰ってこない場合、女性は情緒的・経済的支援を男性から一切受け取ることができず、出産にもその後の育児にも配偶者の男性と二人で取り組むよりもずっと重い負担を抱えることになるためである。そのために女性は男性の身体的な浮気よりも情緒的な浮気に対して抵抗感を覚えるとされる。これらの意味で、男女ともに嫉妬を覚えることにはメリットがあるからこそ現在までその性質が受け継がれてきているとするのが代表的な進化心理学的なアプローチである。

進化心理学的なアプローチから嫉妬を考える際には男女で経験される嫉妬の質的な差を問うものが多い。例えば Buss Shackelford, Kirkpatrick, Choe, Lira, Hasegawa, Hasegawa, & Bennett(1999)の研究では、アメリカと韓国と日本の男女の嫉妬の性差を検討した。「身体的な浮気と情緒的な浮気、パートナーがしていたらより嫉妬を強く感じるものはどちらか」という強制選択式の回答結果を Table1 に示す。結果は Buss et al.(1999)の仮説通り、文化差はあるものの、男性は女性に比べより身体的浮気に、女性は男性に比べより情緒的浮気に対し、0.1%水準で有意に嫉妬を強く感じると回答していた。しかし一方で日本の男性ではアメリカ・韓国の男性とは違い、身体的浮気よりも情緒的浮気に嫉妬をより感じるとする結果が示されていることも注目に値する。この結果は進化心理学者の全ての男性が情緒的浮気の危険性を低く見積もるといふ仮説とは食い違ふ形になる。こういった進化心理学的アプローチの研究には例えば Elphinston, Feeney, & Noller(2011)などが指摘するように身体的浮気か情緒的浮気かといった強制的に二者択一の形式で選択させるような回答形式にはじまる方法論的な問題や、そもそも本能的な部分が現代の嫉妬にどれほどの根拠を持って説明できるか(木村, 2010)ということなどについても疑問や批判が寄せられていることも事実である。

Table1 嫉妬の内容についての性差(Buss, et al., 1999)

	男性		女性	
	身体的浮気	情緒的浮気	身体的浮気	情緒的浮気
米国	76%	24%	32%	68%
韓国	59%	41%	19%	81%
日本	38%	62%	13%	87%

6. 実証的な社会心理学的研究における「嫉妬」の捉え方

Buss(2000)は White & Mullen(1989)の理論を援用する形で嫉妬のメカニズムには情報の入力、処理、出力の過程が不可欠であるとしている。Bevan(2013)による嫉妬の分類では③の Component 要素にあたる次元がこれに該当する。他の海外の研究(e.g., Andersen, Eloy, Guerrero, & Spitzberg, 1995)などでは嫉妬の経験と表現(jealousy experience and expression)等と表されるが、嫉妬をどう認知・経験するかという点(根拠のない疑念から妄想的に嫉妬するのか、証拠をつかんで反動的に嫉妬するのか)と、その経験に対しどうコーピングしていくか(関係を維持しようとするか、穏便に別れようとするか、DV と目されるような破壊的な行動を取るか)という点の二点に嫉妬の病理性が発揮される場面があるように考えら

れる。以降は実証的な社会心理学的研究において、基礎的な知見を提供してくれるであろう先行研究を紹介することとする。

6-1. 嫉妬の経験について

まず、嫉妬の経験(jealousy experience)の方から検討する。Bringle(1991)は一般に経験される嫉妬には二種類の性質があるとして、一つは reactive jealousy (反動的嫉妬)で、もう一つは suspicious jealousy (疑念的嫉妬)であるとした。なお、Parrott(1991)も同様の特徴を持つ fait accompli jealousy (既成事実に基づいた嫉妬)と suspicious jealousy の存在を仮定しているが、この二つの表現はほぼ同じと考えて良いだろう。Bringle(1991)の表す reactive jealousy は、実際の嫉妬を喚起するような適切な場面に対する適応的な嫉妬の反応である。目の前で自分のパートナーが自分以外の第三者と浅からぬ関係にあることを目の当たりにすること等がその一例で、明確な証拠や事実に基づいた誰もが覚えうる嫉妬である。一方の suspicious jealousy は、根拠もなく、あるいは「疑わしい」恋人の言動などを強引に解釈した結果表される不適応的で病理的な嫉妬とされる。家に帰ってみたら配偶者の着衣に乱れがあったように見えた、いつもと何か様子が違ったように思う等がこの例にあたる。しかし、恋人の行動のどこからが「浮気」か(=この場合、reactive jealousy の起爆剤となる確固たる証拠となりうるか)、どこまでが正常な異性の友達との付き合いとするか(=suspicious jealousy でいわれる「些細な」証拠となるか)がその社会・文化・世代によって大きく変動しうることはもちろん、個人間でもその閾値が違ふことは心理学者の言葉を借りるまでもない。そのため Figure1 には Bringle(1991)の reactive jealousy と suspicious jealousy の関係を描いた図を筆者が日本語に直す形で表しているが、この図の曖昧さを見てわかるように、何をもちて正当に嫉妬するだけの根拠があるか・ないかを区別することは難しい。ゆえに嫉妬が正常であるか異常であるかの客観的な判断は時として困難を究めるとも言われている。これら二つの嫉妬の経験の仕方の異同については次節で紹介する Pfeiffer & Wong(1989)や Buunk(1997)をはじめとした実証的な研究でも検討が行われており、現在の社会心理学的アプローチによる嫉妬研究には不可欠のものとなっている。

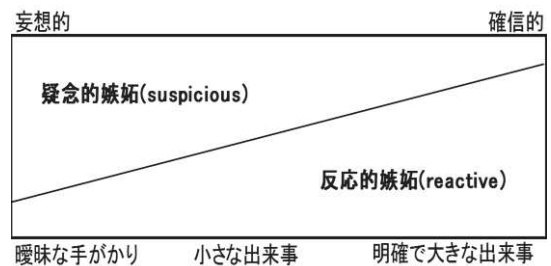


Figure1. Bringle(1991)より、不貞の確度と疑念的嫉妬・反動的嫉妬

6-2. 嫉妬を多角的に捉えるアプローチ

White(1981)は、過去の臨床家や Lazarus によるストレス理論の記述をもとに、嫉妬状況を自己評価が脅かされることへの恐怖と価値ある関係を失うことへの恐怖を原因とした一つのストレス状況とみなし、認知・情動・行動の三側面から嫉妬を包括的に捉えるモデ

ルを提案した。White(1981)の嫉妬モデルでは、まず価値ある関係を脅かすものが認識されると嫉妬の認知的側面が働き、その程度を評価する。次にこの認識から否定的な感情が生起し、同時に脅威への対処法とその結果を考え、最終的に個人はこの恐怖に対して何らかの行動的・認知的な対処をすることで否定的な感情を減衰させるという流れを想定している。

このWhite(1981)のモデルに対して、Pfeiffer & Wong(1989)は、嫉妬が多次元であることには賛同したうえで、いくつかの観点からWhite(1981)を批判し、独自のモデルを提唱している。まず第一点目として、White(1981)のモデルでは基本的に関係への脅威の存在によって嫉妬感情が生起するとされているが、Pfeiffer & Wong(1989)ではそれに加えて、例として離婚後に元夫が自分とは別の女性と歩いているのを見て嫉妬を感じる、という再婚後の女性を提示し、特定の刺激に対する、条件づけられた反応としての嫉妬感情が存在することを指摘している。第二点目として、White(1981)が実際の場面における脅威への評価を嫉妬の認知的側面としているのに対して、Pfeiffer & Wong(1989)では、嫉妬者の、恋人の不貞についての妄想的な心配や疑いが嫉妬の認知的側面であり、これらの疑念は必ずしも脅威の評価に縛られず、時には存在しないライバルとの関係に対しての嫉妬が生起する可能性もある、と主張している。第三点目として、White(1981)は嫉妬の行動的側面を感情的な高ぶりへの認知的・行動的な対処としているのに対し、Pfeiffer & Wong(1989)では、実際・想像上のライバルが認識された時に行われる、探知的・防衛的な行動であるとした。探知的な行動とは、恋人について調べ上げたり、恋人が自分のものであることを確認する行動で、一方防衛的な行動とは、恋人とライバルが親しくなるのを妨害したり、ライバルを貶めたり、恋人とライバルの会話に割って入るような行動を指す。最後に、White(1981)が嫉妬を認知→情動→行動と、順次的なプロセスとして概念化しているのに対し、Pfeiffer & Wong(1989)は、嫉妬の認知・情動・行動的側面は同時に並行して生じるもので、それらは相互に影響を及ぼすものだということを主張している。

更に上記に関連した実証的な研究として、Pfeiffer & Wong(1989)は自分たちの提案したモデルに基づき、嫉妬の認知・情動・行動的側面を包括的に捉える尺度として Multidimensional Jealousy Scale(以降 MJS と略記)を作成し、想定通りの3因子構造を見出して、信頼性・妥当性についても確認した。3因子とは、主に恋人の不貞を心配する・疑う度合いとしての「認知」と、主に嫉妬喚起場面に対して否定的な感情を覚える度合いとしての「情動」、そして主に恋愛のライバルを認識することで、恋人が自分から離れないように行動する度合いとしての「行動」である。Pfeiffer & Wong(1989)は、嫉妬傾向を単次元でしか捉えられていない場合よりも、多次元で捉えた方が、様々な変数と嫉妬の関係についてより包括的に検討できるために、MJSは、当時の既存の単次元の嫉妬尺度よりも、より包括的に嫉妬傾向を捉えられる尺度と考えられるとした。

Pfeiffer & Wong(1989)はまた、このMJSは各因子において、その構造から、正常な嫉妬に加え、病的な嫉妬を捉えることもできると強調している。たとえば、正常な嫉妬者は適度に嫉妬喚起場面に対して反発的な「情動」を示し、恋人との関係を維持しようと、「行動」においてライバルと恋人の関係を阻むような、防衛的な行動を

とり、関係を維持しようとするが、一方で病的な嫉妬者は、想像上の嫉妬を繰り返す「認知」、高い「情動」的な反応、そして「行動」において恋人について調べ上げ、不実の証拠を追い求めるような、探知的な行動を示す、とされている。

MJSは、Pfeiffer & Wong(1989)によって作成されてから、現在に至っても使用されている最も代表的な嫉妬尺度の一つといえ、特に恋人の不貞を心配し、疑う Cognitive Jealousy の項目については、その後の多くの研究(e.g., Bevan & Lannutti, 2002; Gehl, 2010; Guerrero, 1998; Knobloch, Solomon & Cruz, 2001)でも、そのまま使用されている。Elphinston, Feeney, & Noller(2011)が示す通り、恋人が自分から離れていってしまうのではないかとするような妄想的・病的な嫉妬を限定的に捉えうる尺度は、Pfeiffer & Wong(1989)以前にはさほど作成されておらず、それ以前では嫉妬尺度は、具体的な嫉妬喚起場面に対してどれほど情動的・行動的な反応を示すか、という形をとったものが多かった。その後、Pfeiffer & Wong(1989)の研究結果や、Bringle(1991)などにより suspicious jealousy すなわち疑念的な嫉妬についても言及されることにより、現在のように広く用いられるようになったと考えられる。

MJSを用いた実証的な研究の結果として、Cognitive jealousy と Emotional jealousy で得られた結果が対比されることがある。例えば Pfeiffer & Wong(1989)では Cognitive jealousy がパートナーへの愛情と負の相関係数を示したのに対して Emotional jealousy がパートナーへの愛情と正の相関係数が得られたことや、Knobloch et al.(2001)では Emotional jealousy が関係の親密度と正の相関係数を示していたのに対し Cognitive jealousy が関係の不透明性と正の相関係数を示した。Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)の研究では、反動的な嫉妬 (Emotional jealousy に類似した概念) の経験は、肯定的な関係の現象で、それは関係満足感と正の関係にあるとされる。このような調査結果を踏まえ Emotional jealousy、つまり具体的な嫉妬喚起場面に対して否定的な気持ちを覚える度合い (Bringle(1991)が reactive jealousy と表す種類の嫉妬)は猜疑的な嫉妬の側面である Cognitive jealousy (Bringle(1991)が suspicious jealousy と表す種類の嫉妬) に比べ、潜在的に健全な嫉妬の側面として言及されることもある(e.g., Elphinston, Feeney, & Noller, 2011; Barelds & Barelds-Dijkstra, 2007)。Attridge(2013)では、これら二つの種類の嫉妬は関係満足感やパートナーへの愛情などとの関連においてははっきりと Emotional jealousy は「良い」嫉妬の側面として、Cognitive jealousy は「悪い」嫉妬の側面として捉えられていた。これら二つの変数は少なくとも英語圏においては嫉妬の病的側面と非病的側面をうまく反映したものと考えられるのではないだろうか。

しかし、Elphinston, Feeney, & Noller(2011)が指摘するように MJSは恋愛関係における嫉妬を捉える際、そのまま使用されることが少なかった。かなりの数の研究者がこの尺度を使用したにもかかわらず、彼らはいくつ修正を加えて使用したと報告している。このように MJS には何点か問題点も指摘されている。例えば、emotional jealousy、すなわち情動的な嫉妬に関しては、Pfeiffer & Wong(1989)では嫉妬を喚起させるような状況について、その場面に對する自分の感情として“very pleased”から“very upset”の7件法で回答するよう問われていたが、Guerrero, Eloy, Jorgensen,&

Andersen(1993)も指摘しているように、嫉妬喚起場面にて嫉妬者が稀に性的興奮や解放感などの快の感情を抱くことは先行研究でも指摘されているが、その出現頻度からして質問形式に取り入れるのは不適切と考えられる。そのため、回答の得点が極端に偏る可能性が懸念されるという点があげられる。

また、MJSに続く多次元的に嫉妬を捉える尺度作成の研究としては、Buunk(1997)によってMJSとほぼ同様の下位因子を持つ嫉妬尺度も作成され、Pfeiffer & Wong(1989)では検討されていなかった愛着やその他の人格特性などとの関連が見られている。Elphinston, Feeney, & Noller(2011)はMJSの妥当性の検討が薄く、その因子構造と信頼性・妥当性を確認した尺度を作成するためにオーストラリアのサンプルでMJSの改訂版としてShort-Form MJSを構成し、その信頼性と妥当性について確認している。神野(2013)もPfeiffer & Wong(1989)やBuunk(1997)などを参考に、それぞれの尺度の問題点について配慮し、また現代の日本の青年が回答しやすい形となるように「認知的嫉妬」「情動的嫉妬」「行動的嫉妬」の3因子からなる多次元嫉妬尺度を試験的に開発し、その信頼性と妥当性の一部について確認しており、今後の国内での実証的な嫉妬研究や更なる尺度の開発研究が望まれるところである。

6-3. 嫉妬の表現について

次に、嫉妬の表現(jalousy expression)の紹介に移る。倉田(1926)の言葉を借りると、嫉妬が正しいとされるような場合も嫉妬の感情を抱くことが正しい、あるいは当然とされるのみであり、相手に対して憎しみを覚えることや暴力をもって復讐する事までが是認されるわけではない。どろどろとした嫉妬を抱えてしまった際に如何にしてそれを表現・対処していくかということもまた重要である。

既に紹介したPfeiffer & Wong(1989)によるMJSの下位尺度であるBehavioral Jealousyにおいても嫉妬者の行動的特徴は捉えられるとされているが、Attridge(2013)やElphinston, Feeney, & Noller(2011)などの研究結果を参照すると、このBehavioral jealousyについては他の嫉妬の2下位尺度に比べ、比較的明確な結果を示していないようにも捉えられる。嫉妬を経験した個人がどのようにそれに対してコーピングをするかということについては実に様々なパターンが報告されており、MJSのBehavioral jealousyのように一つの下位尺度で一次的に捉えきれない性質のものではない可能性が十分に考えられる。先述のPfeiffer & Wong(1989)やBuunk(1997)以外にも多くの嫉妬研究者が取り組んできたが、その一つの集大成としてCommunicative Responses to Jealousy Scale=嫉妬へのコミュニケーション的反応尺度(CRJS; Guerrero, Andersen, Jorgensen, Spitzberg, & Eloy, 1995)を挙げる。CRJSは70項目からなり、14パターンからなる嫉妬への様々な人と人が関わる形での反応を測定する下位尺度で構成されている。この尺度は嫉妬感情が表されたときの様々な詳しい反応を測定することができるが、項目数が多く、複雑な構造をしていることから、まだ妥当性を確認している段階であろうとElphinston, Feeney, & Noller(2011)は表している。実際Guerrero自身もGuerrero, Hannawa, & Babin(2011)で調査者側にも研究協力者側にも負担があることについては言及しているが、Guerrero et al.(1995)がそれまでの先行研究を精力的に調べ、実際の調査において因子分析の手

法で得たコーピングの分類には注目しておくべきだろう。Guerrero et al.(2011)で最終的にCRJは11の下位尺度からなる52項目の尺度として再構成されたが、それらはGuerrero et al.(1995)やGuerrero & Andersen(1998)を改訂する形でまず4つの直接パートナーに向き合う形での相互作用的な反応があるとされる。①否定的なコミュニケーション(傷ついたことを示す、パートナーの前で泣く、距離を取る等)、②沈黙(嫉妬を感じたことを伝えない、嫉妬状況を避けようとする)、③否認/抑圧(嫉妬していないかのようにふるまう等)、④嫉妬させる行動をとる(パートナーを嫉妬させたり自分から浮気の脅威を作り出す)である。更に他の7つの反応として⑤ライバルへの接触(パートナーへの接触をやめるように伝える、ライバルにパートナーが自分と恋仲にあることを伝える)、⑥ライバルを貶める(パートナーの前でライバルについて悪く言う)、⑦暴力的な行動(皿を割る、パートナーの物を放り投げる)⑧監視/束縛行動(パートナーのことを調べ上げようとする、パーティーでライバルと接触しないようにする)、⑨所有のサイン(「私のパートナーです」と見せて回る、顕在的潜在的ライバルの前でキスをしてみせる)、⑩統合的なコミュニケーション(自分が嫉妬していることを相手に伝えて分かり合おうとする)、⑪補償的な関係修復(パートナーに花やプレゼントを贈ったり、より魅力的になろうとする)が示された。Andersen, Eloy, Guerrero, & Spitzberg(1995)によれば上記のような嫉妬に対する行動的な反応のうち否定的な情動の表出が単独で伝達される場合や分配的なコミュニケーション、明確に距離を取る行動とともに伝えられる場合は関係満足感に負の影響を及ぼすことが見出されているが、一方で統合的なコミュニケーションとのみ共に投入された場合は(つまり腹を割ってうまく否定的な感情を相手に伝えられた場合は)関係満足感が高まることも見出されていた。この結果から、嫉妬を感じたとしてもそれを衝動的に嫌味や暴力といった形で伝えるのではなく、適切に処理することができれば関係の満足感や幸福感は高められる可能性が示唆されているといえよう。

7. 今後の課題

本稿では恋愛関係・夫婦関係のような親密な二者関係における嫉妬について、嫉妬妄想と嫉妬の関係、嫉妬の肯定的な側面にも着目するという観点から先行研究をレビューすることを目的としてきた。本稿で扱った嫉妬に関する言及は未だ心理学的な領域におけるごく一部の観点の表層的な部分にとどまっているが、嫉妬はその他の様々な観点からも言及がなされているため、今後より広い見知から包括的に取り組まれるべき課題であろう。

恋愛関係の規範が文化や時代によって大きく影響を受けるように、嫉妬もまた文化や時代によって強く規定されるものであると考えられる。Buss et al.(1999)で日本の青年は米国や韓国の青年と比べても男女ともに情緒的浮気により抵抗感を示していたように、文化における自己の在り様によって情動の体験様式が違う(Markus & Kitayama, 1991)ことにも留意しながら嫉妬について研究がなされるべきであろう。その点で、今回は深くその内容に触れられなかった古い時代から現在までの資料的論文にも目を通し、近現代日本の社会情勢や家族体制の流動とも照らし合わせながら恋愛関係・夫婦関係と嫉妬の関連について検討することも有意義であると考えられる。

日本国内では恋愛関係における嫉妬そのものを扱った実証的な研究すらも未だ数少なく、また測定する尺度についても研究者間で共有されている優れた尺度は存在しない。今後の更なる実証的な研究の発展が望まれる。

また本稿では言及できなかったが、近年では Hart(2010)や Markova, Stieben, & Legerstee(2010), Hart(2014)など、恋愛関係・夫婦関係以外の嫉妬研究として乳幼児の嫉妬研究がなされている。私たちと重要な他者との密な関係は何も青年期に唐突に始まるものではなく、乳幼児期の保護者が私たちにとって最初期の重要な他者とされる。人がいかにして大切な相手に対して良くも悪くも執着していくのか、その詳細なプロセスを解明するためには乳幼児に始まり友人関係における嫉妬なども含め検討していくことが将来的な嫉妬研究の大きな課題といえよう。

引用文献

- Andersen, P. A., Eloy, S. V., Guerrero, L. K., & Spitzberg, B. H. (1995). Romantic Jealousy and Relational Satisfaction: A Look at the Impact of Jealousy Experience and Expression. *Communication Reports*, **8**, 77-85.
- Attridge, M. (2013). Jealousy and Relationship Closeness: Exploring the Good(Reactive) and Bad(Suspicious) Sides of Romantic Jealousy. *Sage Open*, **3**, 1-17. doi:10.1177/2158244013476054
- Barelds, D.P.H. & Barelds-Dijkstra, P. (2007). Relations between different types of jealousy and self and partner perceptions of relationship quality. *Clinical Psychology and Psychotherapy*, **14**, 176-188.
- Ben-Ze'ev, A (2010). Jealousy and Romantic Love. In Hart, L. S and Legerstee, M. (Eds.), *Handbook of Jealousy-Theory, Research, and Multidisciplinary Approaches*. pp.40-54. West Suzzex, UK. Blackwell Publishing.
- Bevan, L. J. (2013). *The Communication of Jealousy*. New York: Peter Lang Publishing.
- Bevan, L. J. & Lannutti, J. P. (2002). The Experience and Expression of Romantic Jealousy in Same-Sex and Opposite-Sex Romantic Relationships. *Communication Research Reports*, **19**, 258-268.
- Bringle, R.G. (1991). Psychosocial Aspects of Jealousy: A Transactional Model In P. Salovey(Eds.), *The psychology of jealousy and envy*. pp.103-131. New York: The Guilford Press.
- Buss, D. M., Larsen, R. J., Westen, D., & Semmelroth, J. (1992). Sex differences in jealousy: evolution, physiology, and psychology. *Psychological Science*, **3**, 251-255.
- Buss, D. M. (2000). *The Dangerous Passion: Why Jealousy Is as Necessary as Love and Sex*. New York: Free Press. (三浦彊子 (訳) (2001). 一度なら許してしまう女 一度でも許せない男 PHP 研究所)
- Buss, D. M., Shackelford, T. K., Kirkpatrick, L.A., Choe, J., Lira, H. K., Hasegawa, M., Hasegawa, T., & Bennett, K. (1999). Jealousy and the nature of beliefs about infidelity: Tests of competing hypotheses about sex differences in the United States, Korea, and Japan. *Personal Relationships*, **6**, 125-150.
- Buunk, B. (1997). Personality, birth order and attachment styles as related to various types of jealousy. *Personality and Individual Differences*, **23**, 997-1006.
- Daly, M., Wilson, M., & Weghorst, S. J. (1982). Male sexual jealousy. *Ethology and Sociology*, **3**, 11-27.
- Delpierre, G. (1954). *De le jalousie : Ses causes, ses conséquences, ses remèdes*. Paris: Aubier Montaigne (荻野恒一・杉田英一郎 (訳) (1961). 嫉妬の心理 中央出版社)
- Elphinston, R.A., Feeney, J.A., & Noller, P. (2011). Measuring romantic jealousy: validation of the Multidimensional Jealousy Scale in Australian samples. *Australian Journal of Psychology*, **63**, 243-251.
- Elphinston, R. A., & Noller, P. (2011). Time to Face It! Facebook Intrusion and the Implications for Romantic Jealousy and Relationship Satisfaction. *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, **14**, 631-635.
- 遠藤智子 (2007). デートDV-愛か暴力か, 見抜く力があなたを救う KK ベストセラーズ
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human relations*, **7**, 117-140.
- Freud, S. (1922). "Über einige neurotische Mechanismen bei Eifersucht, Paranoia und Homosexualität," *Gesammelte Werke XIII*, Frankfurt am Main: S.Fischer. (須藤勝任 (訳) (2006). 「嫉妬, バラノイア, 同性愛に見られる若干の神経症的機制について」 『フロイト全集 17』東京: 岩波書店)
- 深澤道子・篠崎信之・越川房子 (1992). 嫉妬・羨望に関する基礎的研究 (I) 大学生の恋愛嫉妬について 日本心理学会第 56 回大会発表論文集, 650.
- 船山道隆・濱田秀伯 (2006). 嫉妬妄想・被愛妄想 ころの科学, **126**, 56-59.
- 古城慶子 (2014). 人生後半期の嫉妬妄想 老年精神医学雑誌, **25**, 1083-1090.
- Guerrero, L. K. (1998). Attachment-style differences in the experience and expression of romantic jealousy. *Personal Relationships*, **5**, 273-291.
- Guerrero, L. K., Andersen, P. A., Jorgensen, P. F., Spitzberg, B. H., & Eloy, S. V. (1995). Coping with the Green-Eyed Monster: Conceptualizing and Measuring Communicative Responses to Romantic Jealousy. *Western Journal of Communication*, **59**, 270-304.
- Guerrero, L. K., & Andersen, P. A. (1998). The Dark Side of Jealousy & Envy: Desire, Delusion, Desperation, and Destructive Communication. In Spitzberg, B. H. & Cupach, W. R. (Eds.), *The Dark Side of Close Relationships*. Mahwah, NJ. Taylor & Francis e-Library. (谷口弘一・加藤

- 司 (監訳) (2008). 親密な関係のダークサイド 北大路書房 pp.35-67.)
- Guerrero, L. K., Eloy, S. V., Jorgensen, P. F. & Andersen, P. A. (1993). Hers or his? Sex differences in the communication of jealousy in relationships. In P. Kalbfleisch(Ed.), *Interpersonal communication in evolving interpersonal relationships*. (pp.109-132). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Guerrero, L. K., Hannawa, A. F., & Babin, E. A. (2011). The Communicative Responses to Jealousy Scale: Revision, empirical validation, and associations with relational satisfaction. *Communication Methods and Measures*, **5**, 223-249.
- 半田孝海 (1920). 嫉妬の研究 古文堂
- 長谷川寿一・長谷川眞理子 (2000). 進化と人間行動 東京大学出版会
- Hazan, C. & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- Hart, S. L. (2010). The Ontogenesis of Jealousy in the First Year of the Life: A Theory of Jealousy as a Biologically-Based Dimension of Temperament. In Hart. L. S and Legerstee. M. (Eds.), *Handbook of Jealousy-Theory, Research, and Multidisciplinary Approaches*. pp.57-82. West Suzzex, UK. Blackwell Publishing.
- Hart, S. L. (2014). *Jealousy in Infants –Laboratory Research on Differential Treatment*. New York: Springer Publishing.
- Hendrick, S.S. & Hendrick, C. (1986). A theory and method of love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 392-402.
- 石田孫太郎 (1905). 嫉妬の研究 丸山舎書籍部
- 石田幽南 (石田孫太郎) (1913). 嫉妬論 弘學館書店
- 石川 実 (2009). 嫉妬と羨望の社会学 世界思想社
- 今川民雄・渡邊 舞 (2012). 大学生における対人嫉妬尺度の信頼性と妥当性の検討 日本社会心理学会大会発表論文集, **53**, 260.
- 岩脇三良 (2000). 進化心理学による嫉妬研究: 展望 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **3**, 29-43.
- 神野 雄 (2013). 新たな多次元嫉妬尺度の作成 日本社会心理学会大会発表論文集, **54**, 305.
- 木村彩子 (2010). 嫉妬の臨床的研究の意義: 嫉妬の臨床的問題と心理学的研究のまとめ お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, **12**, 35-46.
- 木村俊夫 (1975). 恋愛の心理 牛島義友・桂 広介・依田 新 (編) 青年心理学講座 2—恋愛と結婚— 金子書房 pp.1-86.
- Kingham, M. & Gordon, H. (2004). Aspects of morbid jealousy. *Advances in Psychiatric Treatment*, **10**, 207-215.
- Knobloch, K. L., Solomon, H. D., & Cruz, G. M. (2001). The role of relationship development and attachment in the experience of romantic jealousy. *Personal Relationships*, **8**, 205-224.
- 越川房子・篠崎信之・深澤道子 (1993). 嫉妬・羨望に関する基礎的研究 (IV) —多面的嫉妬尺度作成に関して— 日本心理学会大会発表論文集, **57**, 672.
- 倉持 弘 (1979). 愛と嫉妬—感性体験の精神病理— 創元社
- 倉田百三 (1926). 一夫一婦か自由戀愛か 岩波書店
- Markova, G., Stieben, J., & Legerstee, M. (2010). Neural Structures of Jealousy: Infants' Experience of Social Exclusion with Caregivers and Peers. In Hart. L. S and Legerstee. M. (Eds.), *Handbook of Jealousy-Theory, Research, and Multidisciplinary Approaches*. pp.83-100. West Suzzex, UK. Blackwell Publishing.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- 南 博 (1949). 自我・愛情・嫉妬—社会心理学的考察 婦人の世紀, **9**, 37-43.
- 三浦香苗・奥山紗世 (2003). 女子大学生の恋愛関係における嫉妬感情およびそれへの対処—性差および恋愛関係・恋愛観との関連の分析— 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **6**, 1-16.
- 宮崎音弥 (1963). 愛と憎しみ—その心理と病理— 岩波新書
- 三好功峰 (1993). オセロ症候群 老年精神医学雑誌, **4**, 439-441.
- Muise, A., Christofides, E., & Desmarais, S. (2009). More Information than You Ever Wanted: Does Facebook Bring Out the Green-Eyed Monster of Jealousy? *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, **12**, 441-444.
- 苗村 晶・浜 治世 (1991). 嫉妬感情と対処方略の検討 日本心理学会第 56 回大会発表論文集, 649.
- 中里浩明 (1991). 嫉妬と羨望: W.G.Parrott の類型学をめぐる—嫉妬と羨望の心理学(1)— 神戸女学院大学論集, **38**, 49-66.
- 中里浩明 (1992a). 嫉妬と羨望の意味構造—嫉妬と羨望の心理学(2)— 神戸女学院大学論集, **38**, 129-134.
- 中里浩明 (1992b). 嫉妬・羨望と社会的比較の過程—嫉妬と羨望の心理学(3)— 神戸女学院大学論集, **39**, 115-130.
- 中里浩明 (1992c). 嫉妬・羨望と自己評価の維持—嫉妬と羨望の心理学(4)— 神戸女学院大学論集, **39**, 79-90.
- 中里浩明 (1993). 嫉妬と羨望の対処方略—嫉妬と羨望の心理学(5)— 神戸女学院大学論集, **39**, 63-78.
- 荻野恒一 (1983). 嫉妬の構造 紀伊國屋書店
- 岡野憲一郎 (1988). 嫉妬における苦痛の精神病理 臨床精神病理, **9**, 315-326.
- 大橋正太郎 (1921). 嫉妬ローマンス—變體心理研究第二編— 精華堂書店
- Parrott, W. G. (1991). The emotional experiences of envy and jealousy. In P. Salovey(Eds.), *The psychology of jealousy and envy*. New York: The Guilford Press, pp.3-30.
- Pfeiffer, S. M. & Wong, P. T. P. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships*, **6**, 181-196.
- Pines. M. A. (1992) *Romantic Jealousy*. St Martins Pr. (鈴木晶・川勝彰子 (訳) (1995). ロマンチック・ジェラシー—嫉妬について私たちの知らないこと— 筑摩書房)
- Salovey, P. & Rothman, J. (1991). Envy and jealousy: Self and

- society. In Salovey, P.(Ed.).*The psychology of jealousy and envy*. pp.271-286. New York: Guilford Press.
- 澤田匡人 (2009). 妬みと嫉妬 有光興記・菊池章夫 (編著) 自己意識的感情の心理学 北大路書房 pp.160-180.
- Sharpsteen, D. J. & Kirkpatrick, L. A. (1997). Romantic jealousy and adult Romantic attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 627-640.
- 篠崎信之・深澤道子・越川房子 (1993). 嫉妬・羨望に関する基礎的研究 (V) —恋愛尺度による妥当性の検討— 第 57 回日本心理学会大会発表論文集, 673.
- Smith, R. H., Kim, S. H. & Parrott, W. G. (1988). Envy and jealousy : Semantic problems and experimental distinctions. *Personality and Social psychology Bulletin*, **14**, 401-409.
- 高橋英彦 (2014). なぜ他人の不幸は蜜の味なのか 幻冬舎ルネッサンス文庫
- 高橋俊彦 (2006). 病的嫉妬の臨床研究 岩崎学術出版社
- 田中雄三 (1989). 病的嫉妬に関する精神病理学的研究の流れ 精神医学, **31**, 1126-1137.
- 瀧田信之 (2009). それ, 恋愛じゃなくて DV です WAVE 出版
- 詫摩武俊 (1993). 嫉妬の心理学—人間関係のトラブルの根源— 光文社文庫
- 坪田雄二 (1998). 嫉妬感情 現代のエスプリ, **368**, 131-140.
- 坪田雄二・深田博己 (1991). 嫉妬感情に関する実証的研究の動向 広島大学教育学部紀要, **39**, 167-173.
- 堤 雅雄 (2006). 嫉妬と自己愛 : 自己愛欲求が嫉妬感情を喚起させるのか 島根大学教育学部紀要 (人文社会科学), **39**, 39-43.
- 上杉 喬・榎場真知子・馬場史津 (2002). 感情体験の分析—嫉妬・憎い・怒りについて—生活科学研究, **24**, 25-40.
- 山本巖夫 (1967). 病的嫉妬, とくにその成立について—現象学的精神病理学の試み— 精神経誌, **69**, 1210-1236.
- White, G. L. (1981). A model of romantic jealousy. *Motivation and Emotion*, **5**, 295-310.
- White, G. L. & Mullen, P. E. (1989). *Jealousy: Theory, research, and clinical strategies*. New York: The Guilford Press.